

# とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	メリー★ポピンズ 豊洲ルーム
施設所在地	東京都江東区豊洲1丁目3-1 キャナルワーフタワーズイーストタワー1F

## 1. 活動のテーマ

<テーマ>

水と砂の性質を知る

<テーマの設定理由>

蛇口から出てくる水に興味をもち、水に手を伸ばして感触を確かめたり、蛇口の先に指を当てて、水が飛び出す様子を観察したりする1歳児の姿が見られていた。また、砂や泥遊びに集中している姿も多く見られていた。1歳児は、様々な性質をもつ水や砂に関心を示していると捉えたため、水と砂をテーマに探求活動を実施した。

## 2. 活動スケジュール

- 1.水の感触を味わう。(7月)
- 2.水の重みを感じる。(7月)
- 3.水の浮力を感じる。(8月)
- 4.水の音を感じる。(9月)
- 5.乾いた砂の状態変化を観察する。(10月)
- 6.園内研修にて職員へ活動報告を行う。(11月)

## 3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

公園内の水道から出る水や、「入れたものが形を変えて出てくる」という特徴をもつじょうご、扱いやすい大きさのバケツなどを準備し、水の動きや感触、音などを試しながら、水や砂の性質について探究できるような環境を整えた。

その中で、子どもたちの反応や発言に着目し、発達や興味・関心に応じて環境構成や活動内容を適宜工夫することで、活動がさらに発展するようにした。

## 4. 探究活動の実践

<活動の内容>

・水に触れる

水を張った小さなバケツやスコップを用意し、子どもたちがそれぞれの方法で水の感触を味わうことを楽しんだ。

・水と砂の性質を知る

水、乾いた砂、水を含んだ砂（泥）をじょうごに通し、じょうごを通る水の動きや手に当たる水の感触、音、水を含ませることによって変わる砂の性質などについて確かめた。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

・水のいった小さなバケツを差し出されると、水を見つめた後、水の中にそっと指先を入れたり、指を動かしたりしていた。また、バケツを傾けて砂場に水を流したり、足元にできた水たまりを観察したりする様子が見られた。

・公園で見つけた落ち葉や花を水に浮かべて観察したり、葉をすくい上げたりしていた。水を用意するとすぐに砂を入れて泥水を作ることの多い子どもたちであるが、この日はバケツの中に透き通った水が保たれていた。

・じょうごに興味を示し、触ったり、穴をのぞき込んだり、汲んできた水や砂を入れてみたりするなど、試行錯誤しながら使っている様子が見られた。水や砂をじょうごの上から入れる作業を何度も繰り返しており、出口から形を変えて出てくる水や砂を観察している様子であった。また、水を含んだ砂はじょうごを通らず、「出てこない」とつぶやく児もいた。さらに、水の動きをオノマトペで表現する保育者の言葉をまねて、「ザー」「チョロチョロ」「サラサラだね」などと発語する児も見られた。



## 5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

じょうごの上（注ぐ方）だけでなく、下（出る方）を観察している児の姿から、児は形がなく、高いところから低いところへ流れるという水の流れに気づきつつある様子や、じょうごという道具の使い方を学んでいる様子が見られた。また、水や砂はじょうごを通るが、水を含んだ砂（泥）は通りにくいことに気づいた児もおり、児の発達においては、物の性質の違いに触れながら理解し始めている様子を捉えることができた。さらに、保育者は探究活動を行う児の姿を見守りつつ、児の発言や発見に応答的に関わったり、水や砂の感触や動きをオノマトペで表現したりすることで、児がより活動に関心を高めながら取り組むことにつながると考えられた。

# とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	メリー★ポピンズ 豊洲ルーム
施設所在地	東京都江東区豊洲1丁目3-1 キャナルワーフタワーズイーストタワー1F

## 1. 活動のテーマ

<テーマ>

水の性質を知る

<テーマの設定理由>

7、8月の水遊びの期間、子どもたちは全身で水に触れて遊ぶ姿が多く見られ、水への興味や関心の高まりが感じられた。また、「なんで水って冷たいの?」「水は透明だね」など、水の性質に関する言葉が聞かれるようになったことから、本テーマを「水の性質を知る」と設定した。

## 2. 活動スケジュール

6～7月 水遊びを始める

「水に触れる」「友達や保育者と水の掛け合い」「宝探し」

8月 水の性質を知る

「波の起き方」「浮いたり沈んだり」「水の跳ね返り」

9月 色水遊び

「色水を混ぜる」「目的の色を作る」

12月 水の性質を知る

「水の流れ方」「水の落ち方」

2月 水の性質を知る

「氷が溶けると何になる?」

## 3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

### 【素材】

竹、水、石、砂、泥、氷

### 【道具】

たらい、スコップ、ペットボトル、鍋、フライパン、バケツ、絵の具、筆

### 【環境構成】

- ・少人数グループ（6人）で活動を行い、一人ひとりが素材や道具に十分触れながら、活動に集中できるようにした。
- ・素材や道具は、初めは保育者が用意したが、活動を進める中で、子どもたちが自ら必要なものを選び、用意できるように関わった。
- ・「水の性質を知る」というねらいのもと、保育者がすぐに答えを示すのではなく、子どもたちが自ら考えたり試したりする時間を確保できるようにした。

#### 4. 探究活動の実践

##### <活動の内容>

6月末の気温が高い日から、少しずつ水遊びを行った。

7月に入り、本格的な水遊びを始めた。1年ぶりの水遊びであったため、まずは「水に触れる」「全身で水遊びを楽しむ」ことをねらいとして活動を行った。主に行った活動は、「友達や保育者との水の掛け合い」や「宝探し（宝に見立てた石を泥水の中から探す）」である。

8月に入り、「水の性質を知る」ことをねらいとして活動を行った。たらいの中の水をくるくるとかき回して波を起こしたり、石を水に落として跳ね上がる水の様子を観察したり、葉の上に石を置いて水に浮くかどうかを試したりした。

9月の色水遊びでは、初めに保育者が色水を掛け合わせ、「何色に変化するか」を観察できるようにした。その後、子どもたちが様々な色水を組み合わせ、それぞれが実験者のような気持ちで活動に取り組む姿が見られた。

12月の活動では、竹筒に水を流し、どちらの穴から水が流れ落ちてくるかを予想する遊びを行った。1回目は竹筒の上の穴から水を流し入れ、2回目は竹筒の向きを逆さにし、下の穴から水を入れた。

また、砂場に穴を開けてそこを目的地とし、その穴まで竹を並べて水を流すにはどのように設置すればよいかを考える遊びも行った。活動を繰り返す中で、目的地までの距離を徐々に伸ばし、難易度を高めていった。

2月の雪を使った遊びでは、雪をバケツに集めて日向と日陰に置き、どちらが早く溶けるかを確かめる活動を行った。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

7月の水遊びでは、子どもたちは初めこそ水に触れることを楽しんでいて、徐々に飽きてしまう様子が見られた。保育者が一緒に水遊びを行うと、全身で濡れることを楽しむ姿が見られた。また、「宝探し」を行うと、水に触れることを嫌がっていた子も、自ら泥水に手を入れて宝を探していた。

8月の水遊びにおける活動では、「これはどうなっているのだろう?」「水がぐるぐる回っている」など、普段の水遊びとは違う角度の活動に興味を示す様子が見られた。保育者の行うことを真似るように、水に石を落としたり、葉の上に石を置いたりする姿も見られた。

9月の色水遊びでは、「これは何色になるの?」「多分赤色になるんじゃないかな?」などと話し、色水に興味を示している様子が見られた。

12月の遊びでは、保育者が「水がどちらから流れてくるでしょう?」と尋ねると、入れた穴とは反対の方から出てくると予想して、「こっち」と指さす姿が見られた。予想した方とは反対から水が出てくると、「なんでだろう?」と不思議そうな表情を見せていた。

また、目的地（砂場に開けた穴）まで水を流すにはどのように竹を設置していけばよいかを考える遊びでは、子どもたちが考える時間を十分に取れるよう、保育者がすぐに答えを示さないように関わった。その結果、子どもたちは考える場面が増え、「どうすれば良いのか分からない」「難しい」などと話し、険しい表情を見せる姿も見られた。しかし、自分たちで目的を達成した時の表情は一段と輝き、「できた」「こうすれば良かったのか」と達成感を言葉にして表す姿が見られた。

2月には雪が降り、雪を使った自然遊びを行うことができた。雪を使った活動では、保育者も予想していなかったことが起きる場面もあり、それによって普段の活動以上に不思議さを感じている様子が見られた。



## 5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

水の流れについては、4、5歳児であれば既に知っているのではないかと考えていたが、実際に活動を行ってみると、まだ知らないことの方が多く気づくことができた。このような活動は、実際に体験することで学びにつながるものであり、知っているだろうと思い込んで活動を行わないままにしていると、子どもたちの経験につながらない可能性があると感じた。今後も、このように試したり確かめたりする活動を取り入れていきたいと考えた。

また、保育者が「水は上から下に流れる」とすぐに伝えることは容易であるが、子どもたちが考える時間を大切にしながら、どのタイミングで言葉を添えるかを考えていくことが重要であると感じた。考えることに疲れてしまい、別の遊びを始める姿も見られたため、活動への関わり方について適切なバランスを考えていきたい。